HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 異文化間教育を目指した映像（メディア）教材の活用と教育実践の共有（その3） |
| Author(s) | 齋藤, 眞宏 |
| Relation | 異文化間教育学会第31回大会. 平成22年6月12日～平成22年6月13日. 奈良教育大学, 奈良市. |
| Issue Date | 2010-06-13 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/43122 |
| Type | conference presentation |
| File Information | saito_3.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 異文化間教育を目指した映像(メディア)教材の活用と教育実践の共有（その３）

異文化間教育学会第31回大会
@奈良教育大学

旭川大学　経済学部　齋藤　真宏
E-mail: saitoum@live.asahikawa-u.ac.jp

| 講（全15講） | 学習内容 |
| --- | --- |
| 第１講 | オリエンテーション<br>「パワーシャッフル」「部屋の四隅」<br>小レポート①：「ある学生の意見：異文化理解は必要ない」[7]に賛成か、反対かを論ぜよ。 |
| 第２講 | 「世界がもし100人の村だったら？」小レポート② |
| 第３講 | 「地球の仲間たちフォトランゲージ」小レポート③ |
| 第４講 | 「レヌカの学び」小レポート④ |
| 第５講 | 「雪渡り」から学ぶ他者理解　小レポート⑤⑥（本時） |
| 第６講 | アイヌ民族と国民国家日本 |
| 第７講 | 「イオマンテ」とアイヌ民族と日本人　小レポート⑦ |

## ２．2009年度「異文化間教育」指導計画（１）

## ※夏期集中講義（8月21～28日）で実施

- 第5講「『雪渡り』を通じた他者理解」では小レポートを2本課した。その記述に基づいて学生たちの学びを評価する。
  「市民的資質の評価は、価値判断の根拠とその組み立ての論理の分析を通してできる」（岩田、p.33）
- 履修学生数：９名（１名は当日欠席）
  全員が教職課程履修者
  社会人学生6名、現役の学生3名

# ６．研究手法

# ７．本時の目標

①　〈異文化に出遭い、自分を見つめる〉
狐という「異文化」に対峙した時の自分の感情を認識することができる。（小レポート⑤）

②　〈自分を見つめる〉
なぜ①の感情や考えを抱いたのか、判断をしたのかについて、それらが構築されてきた過程を振り返ることができる。（小レポート⑥　問１および問２）

③　〈関係性の構築のための視点の獲得〉
他者理解は「自分次第である」という狐の紺三郎の言葉をパラフレーズすることができる。（小レポート⑥　問３）

④　〈社会の発展のための行動〉[発展]
異文化間理解についての自分なりの理解をもとに実践を考案することができる。（小レポート⑥　問４）

## 学習内容

（前時で各学生が書いた小レポートをコピーして配布）

T：（前時の確認）

異文化に接する際には・・・

- 自分の偏見に注意
- 地域差や個人差に注意
- 言葉とは相対的なもの

異文化に接したときには、一人ひとりを理解する姿勢が大切

T： 指示①

「それぞれが書いた意見で印象深い意見を挙げてください」

## 学生たちの動き

S：前時に書いた小レポートを見ながら、PPTを見る

S：それぞれ印象に残った意見を理由をつけて述べる。

（予想される意見）

- 一人一人の寛容性が大切
- 偏見はなくさなければいけない
- 偏見や差別は簡単になくならない

等

# 8．導入（15分）「レヌカの学び」の共有

# ９．展開①（10分）

| 学習内容 | 学生たちの動き |
| --- | --- |
| T：発問①<br>「偏見をなくすことは可能だろうか？」<br>※すべての学生の回答を板書する<br>T：発問②<br>「なぜ偏見はなくならない？」<br>※全ての学生の回答を板書する。 | S：回答する。<br>（予想される回答）<br>「偏見をなくすことは無理」<br>S:回答する。<br>（予想される回答）<br>「人間は偏見をもつもの」<br>「社会が偏見だらけ」 |

## 学習内容

T:指示②
「それでは『雪渡り』のＤＶＤを視てもらいます」

- 発問及びグループディスカッションの最中は映像を止める
- 発問一つにつき5分前後の考察のための時間をとる。学生の回答はすべて板書する
- 教師は意見が言いやすい雰囲気をつくる
- 偏った意見に対しては、別の視点を提供し、考えを深めるきっかけづくりに努める
- 学生が参加しない権利も認める

## 学生たちの動き

Ｓ：「雪渡り」を視聴する

# 10.展開②－１（50分）

## 学習内容

（四朗とカン子が狐の幻燈会に誘われる場面でVTR一時停止）

T：発問③

「あなたが四朗だったら、狐の幻燈会に行きますか？行きませんか？その理由も述べなさい。」

## 学生たちの動き

S:回答する

（予想される回答）

<u>行くと答える学生</u>

- 行かないと狐に失礼
- 自分が知らないことを知る貴重な機会だから
- 信用がおけそうな狐だから

<u>行かないと答える学生</u>

- 行ったらだまされる
- 夜道は危険だから
- エキノコックスが危ないから

# １１．展開②－２

## 学習内容

（四朗がお兄さんに狐の幻燈会に行くことを相談する場面でVTR一時停止）

T:発問④

「もしあなたが四朗の担任の先生で、狐の幻燈会に行くことを四朗から相談されたらどのようなアドバイスをしますか。」

## 学生たちの動き

S:回答する

（予想される回答）

<u>行くように指導する学生</u>

- 未知の世界を体験することは貴重
- 「狐が悪さする」というのは偏見
- 実際に体験することが大切
- 一緒についていく

<u>行かないように指導する学生</u>

- 責任問題になりかねない
- 身を守るため
- もっと他にやること（勉強、家の手伝い等）がある

# １２．展開②－３

## 学習内容

（幻燈会の最後に再びお団子が出されてVTRを一時停止）

T:発問⑤

「幻燈会のときにお団子が再び出されたとき、あなたが四朗だったら食べますか？食べませんか？その理由はなぜですか？」

## 学生たちの動き

S：回答する。

（予想される学生の反応）

<u>食べると答える学生</u>

- 狐を信用している
- 狐への偏見に気が付いたから
- （団子を出されたときに「人間が（狐が作った食べ物を）食べるかな？」などと周囲の狐たちが言うのを聞いて）空気を読んで食べる
- 狐との共生のため

<u>食べないと答える学生</u>

- 狐を信用できない
- 万が一を考えると食べられない

# １３．展開②-4

## 学習内容

Ｔ：指示
「それでは小レポート⑥を記入してください」

問１．日常生活において四朗とカン子が体験したような出来事に遭遇したことはありますか？

問題２．問題１においてなぜそのように行動したのですか？

問題３．この講義内容を踏まえて、異文化間理解のために必要なことを書きなさい。

## 学生たちの動き

Ｓ：小レポート⑥の記入
※周囲と相談をしても可

# １４．発展①（15分）

## 学習内容

問題４．問題3の解答を踏まえて、もしあなたが教師だったならば、どのような異文化間理解のための授業を企画しますか？できる限り具体的に述べなさい。

※学習指導案にまで具体的にならなくても可

※次回の講義で学生の意見を共有する

## 学生たちの動き

S:小レポート⑥の記入（続き）

# １５．発展②

① 〈異文化に出遭い、自分を見つめる〉
狐という「異文化」に対峙した時の自分の感情を認識している。（小レポート⑤）
② 〈自分を見つめる〉
なぜ①の感情を抱いたのかについて現在の自分が構築されてきた過程を振り返っている。（小レポート⑥　問１および問２）
③ 〈関係性の構築のための視点の獲得〉
他者理解は「自分次第である」という狐の紺三郎の言葉をパラフレーズしている。（小レポート⑥　問３）
④ 〈社会の発展のための行動〉[発展]
異文化間理解についての自分なりの理解をもとに実践を考案している。（小レポート⑥　問４）

# １６．評価の観点

**肯定派（幻燈会にも行くし、団子も食べる）５名**

- 狐のことを信じきれない一方で、信用したいという気持ちの葛藤
- 教師としてかかわる場合は判断が異なる。

「行かせない」「子どもだけで生かせるのは心配なので自分もついていく」

**反対派（幻燈会にも行かないし、お団子も食べない）１名**

- とにかく信用できない

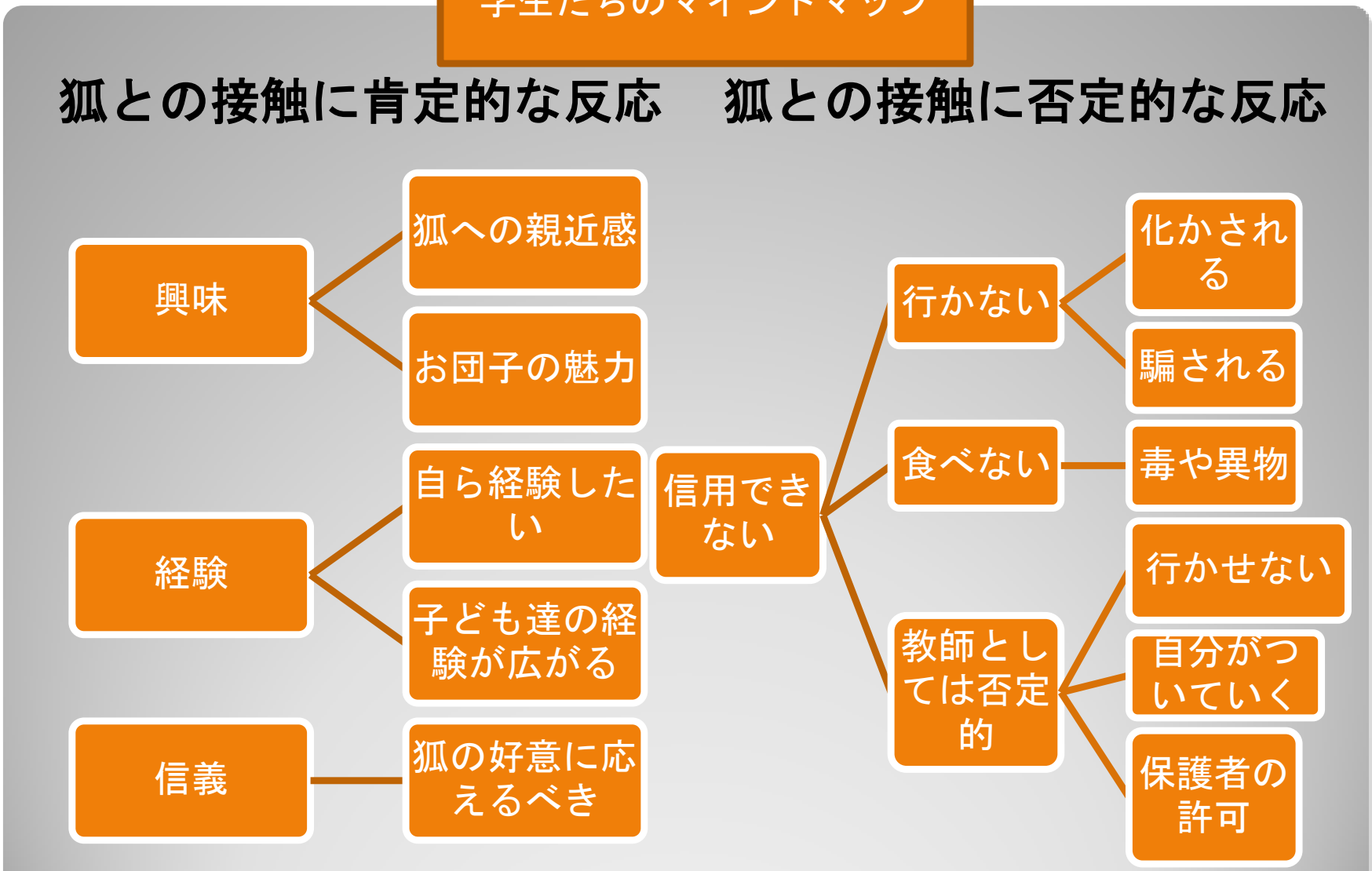
「化かされては大変」

**中間派（２名）**

- 何があるか興味があって行くけれども、食べ物（お団子）を食べる気にはならない。
- 教師としての判断は危険なので子どもだけでは行かせない。

## １７．狐という「異文化」に対峙した時の自分の感情を認識している。（小レポート⑤）

学生たちのマインドマップ



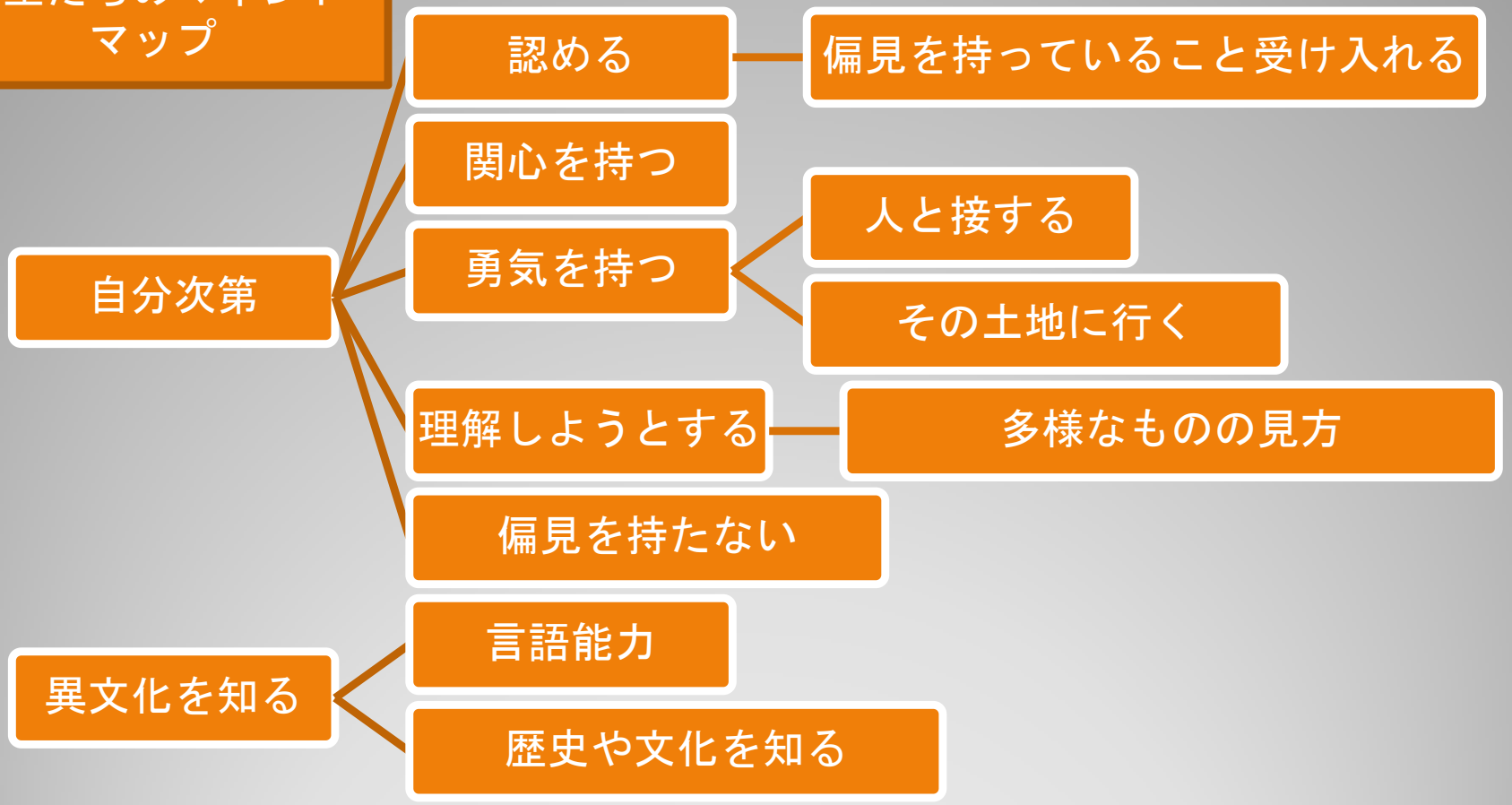

# １８．８名の学生の「異文化」との出遭い

- 海外での体験（２名＊うち１名は失敗経験）
- 留学生との交流経験（１名）
- 宗教の勧誘（１名＊結局断った）
- 友人との関係（２名）
- 経験なし（２名）

  うち１名の学生は狐との交流に極めて否定的な回答を寄せていた。

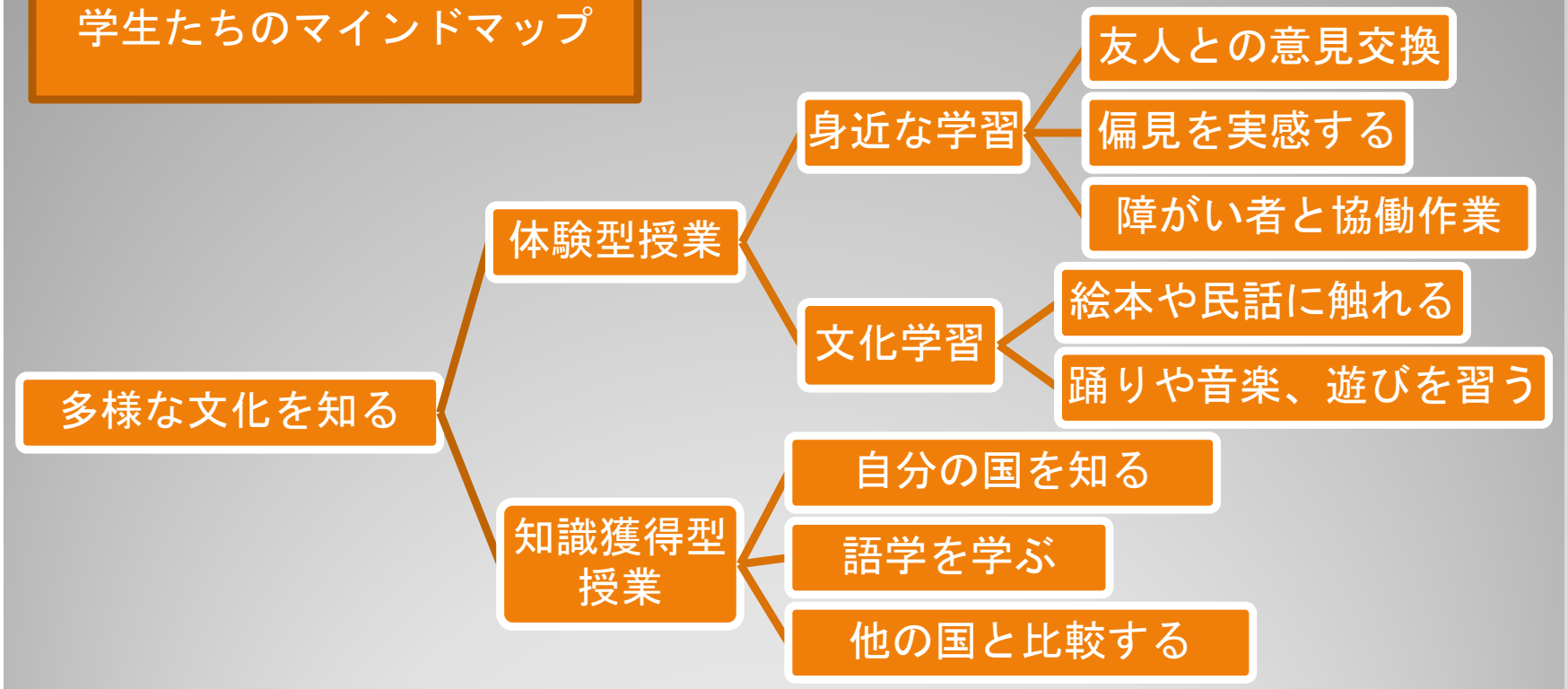
**１９．①の感情、考え、判断についてそれらが構築されてきた過程を振り返っている。**

学生たちのマインドマップ




２０．他者理解は「自分次第である」という狐の紺三郎の言葉をパラフレーズしている。

# 学生たちのマインドマップ




**参考　異文化間理解についての自分なりの理解をもとに実践を考案することができる。**

① ８名の学生全員が「異文化」に直面した時の戸惑いや葛藤を認識することはできた。

② ３名の学生は自分への振り返りを本授業の過程の中で実践した。

学生のコメント（小レポート⑥問３）から

「わずかなきっかけで目の前の霧が晴れる」

「偏見や先入観を持っていることを受け入れる」

「自分に危害を加えられると思うと自然に避けてしまう」

# ２２．まとめ①：８名の学生の学び

③　８名の学生全員が、他者理解は「自分次第である」という狐の紺三郎の言葉をパラフレーズできた。

④　８名の学生全員が、それぞれの異文化間理解観に基づいた授業を思い描くことができた。しかし３名は極めて抽象的な段階でとどまっていた。

学生のコメント

「ディベートをする」

「体験型」

「どれか一つが正しかったり、普通なわけではないということを考えてもらったうえで、異文化に触れられる授業をする」

# ２３．まとめ②：８名の学生達の学び